

大 毛 沖 遺 跡

調査の経緯 大毛沖遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曽川町にかけて所在し、木曽川によって形成された標高9 m前後の自然堤防および後背湿地に広がりが見られる遺跡である。

発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団および愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として昨年度より実施している。今年度は国道22号線の西側を中心にA区～I区までの20,100㎡を発掘調査した。

調査の概要 昨年度の調査の結果、遺跡の中央部を北東方向から南西方向に流れていた旧河道の存在が明らかにされた。今年度の調査ではこの旧河道をC区・D区・G区で確認し、特にC区とD区ではこれを精査することができた。それによると古代前半では流れが認められるもの古代末には流路の変更により湿地化し、順次埋没が進み中世末段階には若干の凹地状を呈するものの平坦化した状況を解明できた。こうした変遷は大毛沖遺跡の形成及び展開に深く作用していたことと思われる。即ち旧河川の右岸域では概して遺構は稀薄であるのに対して、左岸域には古代に遡る住居跡も確認されており大毛沖遺跡の中心地が左岸域に展開するものと想定できた。しかし、右岸域にあたるH区では中世後半から戦国期にかけての遺構・遺物が多く検出されており、新たな遺跡の展開が読みとれる。 (高橋信明)



第1図 調査区位置図 (1 : 5000)

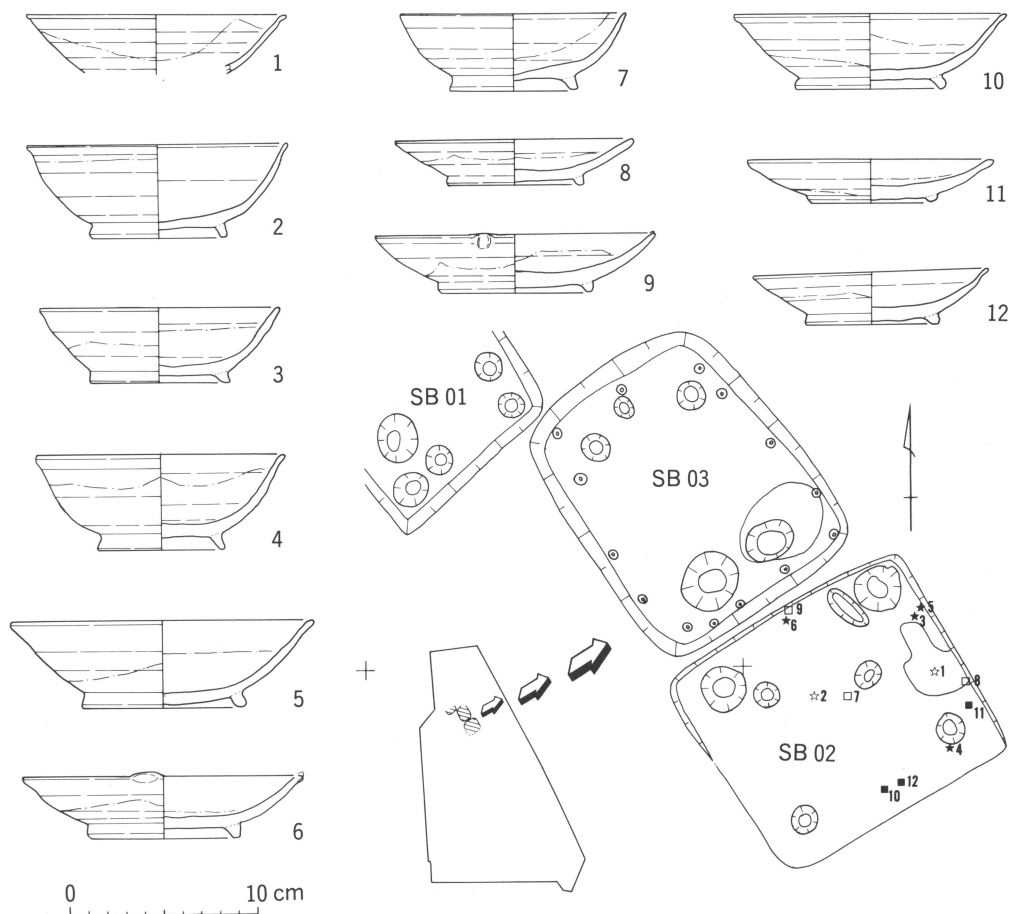
奈良・平安 C区では、調査区の南側で竪穴住居跡が7棟（奈良時代2棟・平安時代5棟）確認できた。このうちSB06は規模が3.5×4.5m、造付竈を有する8世紀初頭の竪穴住居である。

F区では、調査区の北側中央で竪穴住居跡が3棟確認できた。

3棟のなかで、北側に位置するSB01では、東側一辺4mのみ計測できただけで他の三辺が中世の溝により切られており全体の規模及び形態は不明である。住居内の柱穴は10ヶ所、灰釉陶器の椀、皿、土師器甕が出土。虎溪山1号窯式の製品が多く出土し、篠岡27号窯式、篠岡1号窯式の製品も数点出土している。

SB02は南側に位置し北側一辺3.5mと東側一辺3mが計測できた。長方形を呈した住居跡で柱穴は7ヶ所、美濃窯で生産された灰釉陶器、大原2号窯式（1、2）4点、虎溪山1号窯式（7～9）13点と尾北窯で生産された灰釉陶器、篠岡4号窯式（3～6）5点、篠岡27号窯式（10～12）3点と土師器甕が出土している。灰釉陶器の中では虎溪山1号窯式の製品が多く出土している。東壁中央には炭化物を含む焼土が厚く堆積していた。

SB03は短辺2.7m、長辺3.4mの長方形を呈した住居跡で柱穴が5ヶ所、住居内を巡る小柱穴が14ヶ所、灰釉陶器の椀、皿が出土し、虎溪山1号窯式の製品が多い。（小澤一弘）



第2図 94F区 SB02出土遺物実測図

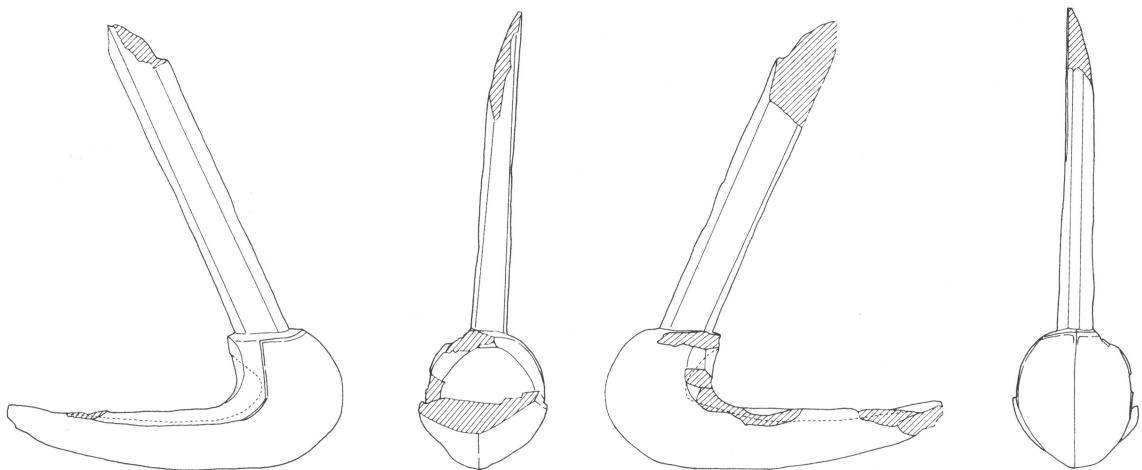
旧河道 北東から南西にかけて遺跡のほぼ中央を縦断する旧河道について述べる。その規模は幅約16m、深さ約70cmを測る。旧河道はおおよそ9世紀には流路が左岸側に移行し、その後、河跡湖となる。河跡湖の堆積についての詳細は、自然科学の項で述べているので、ここでは出土遺物を中心に述べる。河跡湖の堆積は大きく4層に分けられる。すなわち、河跡湖の深部にあたる最下層（緑色腐植質土・Ⅰ層）は9～10世紀代、湖岸から基盤層が流れ込んだ灰褐色粘質シルト・Ⅱ層は10～11世紀代、これらを覆う黒褐色腐植質土層・Ⅲ層は12～13世紀代である。またⅢ層より上位層は12～15世紀代を中心とする方形土坑が散在する。

木製鐙 特筆すべき遺物は、木製の鐙（Ⅱ層）と鉄製の羽釜（Ⅲ層）があげられる。鐙の形態は舌長鐙、吊手部と踏込・舌部が一体となった一木造、全面に漆を施している。鳩胸部中心に入る稜線と吊手部の傾きから左足用と考えられる。時期は、層位から10～11世紀代と考えられる。羽釜について、鐙端部は欠損しているものの遺存状態は良い。側面観は砲弾形を呈し、直線的に立ち上がる口縁部と丸い底部を持つ。外底面中央には丸形湯口が残っている。口径は19.2cm、器高は24.1cmである。時期は層位と形態から12世紀後半と考えられる。



D区 旧河道Ⅲ層上面

D区旧河道Ⅰ層除去後（中央部分）



第2図 木製鐙実測図（1/6）

鎌倉・室町時代 遺構は河跡湖を基軸とした展開を示す。河跡湖の兩岸には13～15世紀の溝が2～3条め

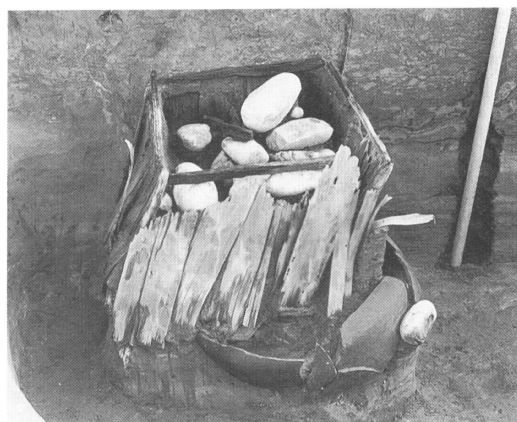
ぐる（C・D・E区）。溝の規模は、幅30～50cm、深さ10～30cmである。出土遺物については、灰釉系陶器の碗類が中心で稀少ながら見られる。河跡湖とその右岸には方形土坑群が散在する。河跡湖の上位層に展開する方形土坑は、規模が大型（1.5×4m）・中型（1×2m）・小型（1m四方）の3種ある。また、河跡湖の兩岸に並行して展開する溝に対してこれらの方形土坑は主軸が直交あるいは並行する。ただ、方形単位など企画性のある構成は認められない。これらの状況は93G・D区と一致し河跡湖の上位層にはほぼ連綿と続くことが確認できた。遺物としては、D区SK13の最下層より出土した12世紀の三筋壺以外は小片が多く、少量である。方形土坑は河跡湖上だけではなく、その右岸域にも展開する（B・E・I区）。河跡湖上の方形土坑より比較的まとまりをもって構成する。特にE区では、河跡湖に対して長径が直行あるいは並行するものがあるものの、これらの方形土坑群は全体的に河跡湖にほぼ縦列配置となる。

昨年度の調査から鎌倉時代を中心とする居住域は旧河道の左岸域（93A・B・C区）で確認している。右岸域では井戸を2基確認したものの（93G区）、居住域と推定できる区画溝やピット群などは認められなかった。本年度の調査では、15世紀後半から16世紀初頭の遺構が集中するH区から井側の残る3基を含めた井戸が8基確認できた。なかでもHb区SE03は井側と井筒（曲物）の下部から、破損はしているものの井筒に転用した13世紀末から14世紀初頭の常滑産甕が出土した。また、木製礎板をもつ掘立柱建物も1棟確認している。以上のように旧河道の右岸域にも居住域が展開することが確認できた。

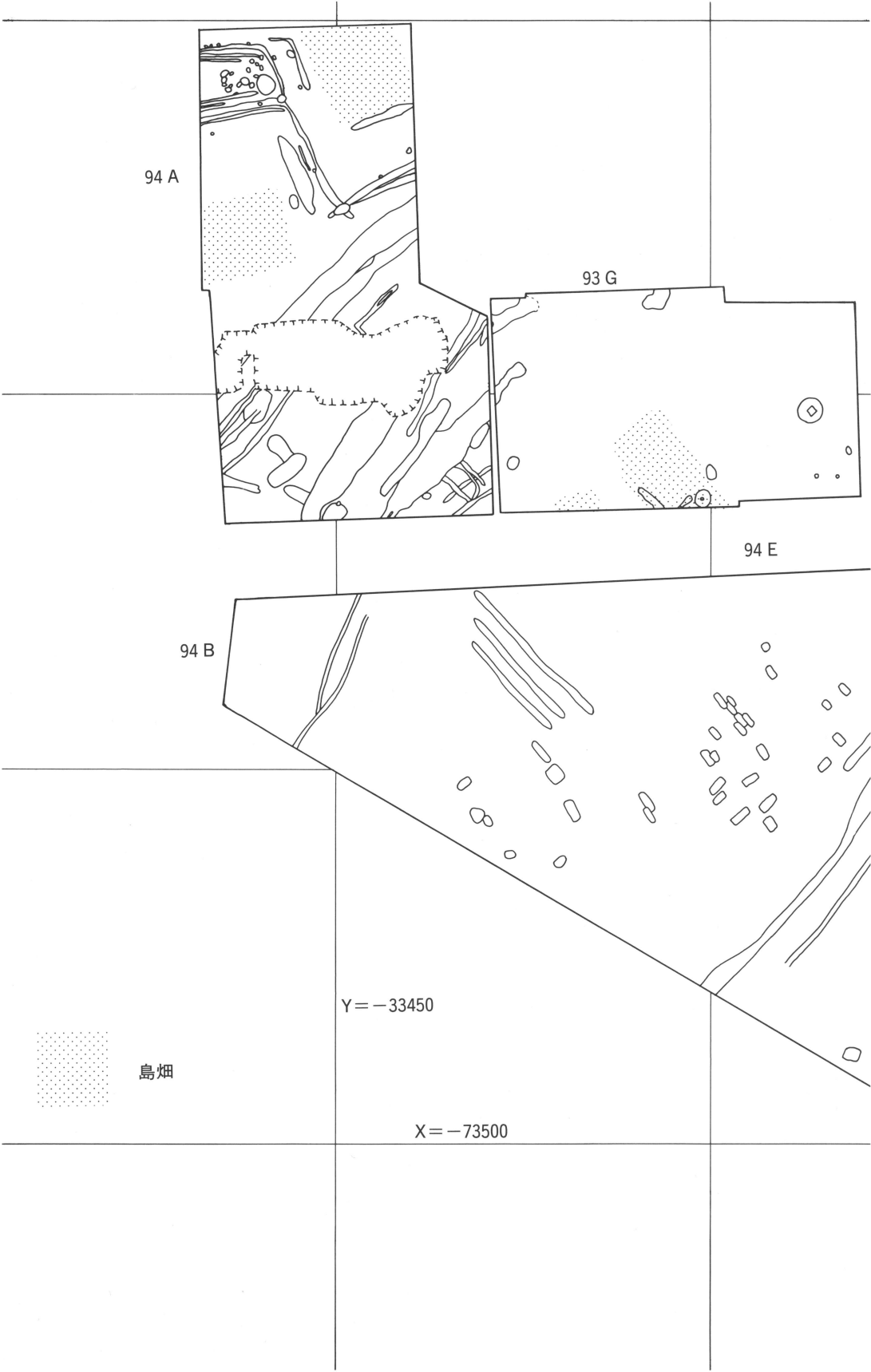
島畑 昨年度、大型竪穴状遺構として報告した93C・G区に展開する遺構は、『明治17年地籍図』にみられる「内畑」の表記箇所と一致し、島畑状遺構と改める。また、本年度の調査区ではA・C・F区で同様の遺構が7箇所検出できた。さらに方形状のプランの堆積が逆台形、すなわち遺構検出面より上位に島状の高まりとなることが明らかになった。包含する遺物は平安時代の灰釉陶器・土師器から14世紀の灰釉系陶器まで含まれている。したがって、「島畑状遺構」の形成時期は14世紀以降になるであろう。（永井宏幸）



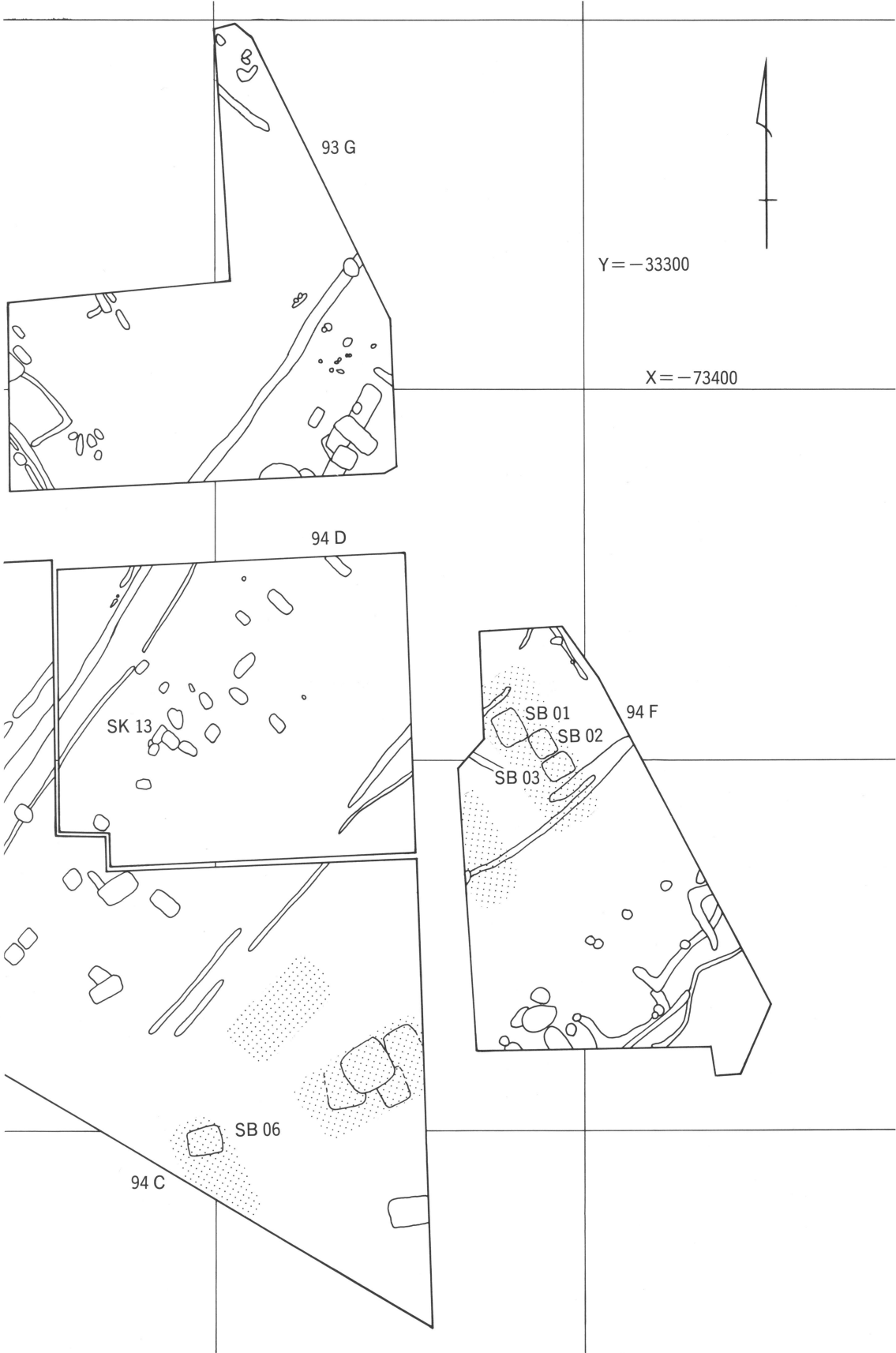
鉄製羽釜



Hb区 SE02



第4図 93 G区・94 A～F区主要遺構配置図 (1 : 800)



戦国時代 戦国時代の遺構はH区に集中し、H区中央部分の東西方向に平行する北の溝群（S D08、09、11）と南の溝群（S D02～04、18）によって画された区域内ではほとんどの遺構が検出された。（第5図）

遺 構 二つの溝群のうち検出面で最大の溝はS D18で、幅5.6m、深さ0.8m、断面は緩やかな傾斜のV字形である。S D03は、深さ約0.2mと浅く、他の溝の埋土はシルトであるのに対し、白色粗砂が堆積している。北の溝群の新旧関係はS D11は単独で存在し、S D08→09の順である。南の溝群は、S D03、18が単独で存在し、S D04→02の新旧関係である。溝群に区画された区域には、小規模の溝、土坑が検出された。溝は溝群の軸に対して概ね平行かあるいは直行する方向であり、S D14、25、27などは直角にまがり、溝がクランク状に連続する部分がある。いずれも深さ0.3～0.4mで断面U字形のものが多く、S D13、14は緩やかな傾斜のV字形である。土坑は南半分に比較的多く検出された。柱穴と考えられる小土坑は集中して検出されたが掘立柱建物等は確認されなかった。大形の土坑はいずれも浅く、検出面から深さ0.2～0.3mである。

遺 物 出土遺物は、大部分が15世紀後半から16世紀前半の時期に属す。溝の遺物は特定の溝から集中して出土する傾向がある。S D09からは16世紀初頭の古瀬戸陶器類、土師器（皿、鍋）、漆碗、各種木製品等が出土した（第6図）。S D14、18、19からは土師器皿がまとめて出土している。S D18からは底から浮いた状況で円礫が多量に検出された。S K106、107、174からは土師器（皿・鍋）と木製品等がややまとまって出土している。

居住域 ほぼ同時期の平行して走る二つの溝群に画された区域に同じ時期の遺構が集中して存在することから、周囲に溝を巡らす集落あるいは屋敷地などの居住域をこの部分に想定することが可能である（第5図）。この場合、居住域に対して内側にある切り合い関係のないS D11～18が対応し、また、新旧の切り合いのあるS D09～02、S D08～04が対応関係にあると考えられる。S D03は、埋土、規模及び断面形状から他の溝と性格が異なるものと考えられる。居住域の南北は最大約45mであるが、東西辺は調査区外であり確認できない。今後細かい遺構の時期的な変遷および性格が検討課題となる。（酒井俊彦）



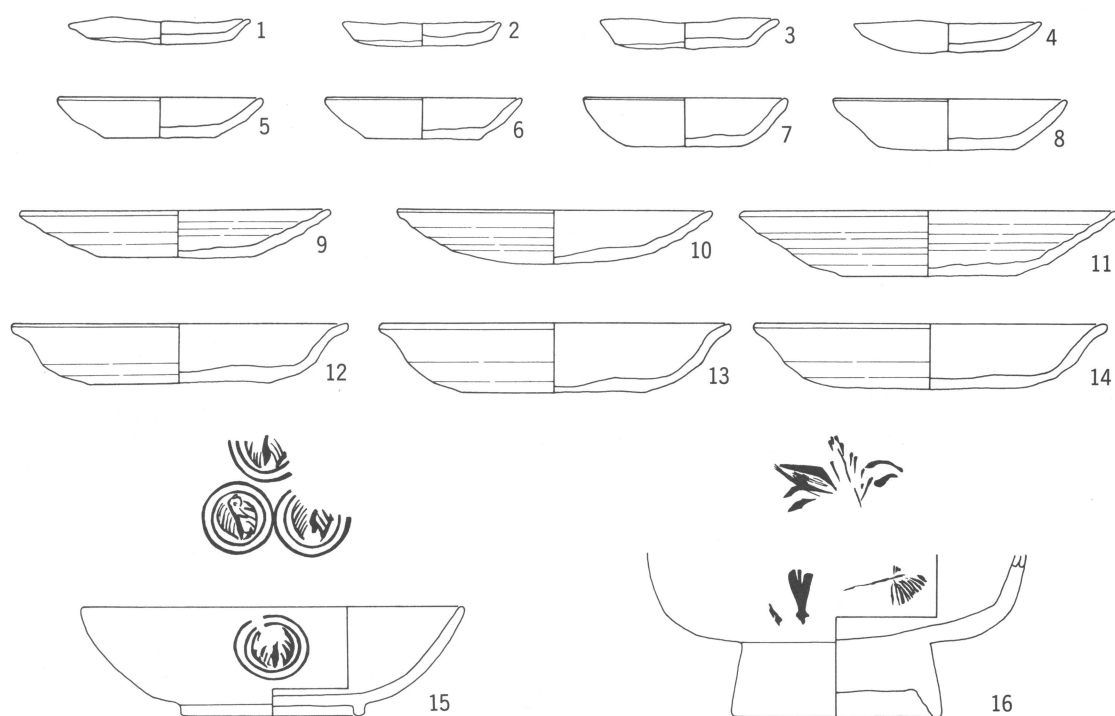
H区 S D09遺物出土状況



H区 S D08・09・11



第5図 H区戦国時代遺構図 (1/500)



第6図 H区SD09出土遺物 (1/3) 土師器皿1~14 漆碗15・16

自然科学 大毛沖遺跡C区及びD区において調査区を北東から南西方向に切る形で、腐植質に富む堆積物が旧河道を埋積する様子が確認された。以下ではD区の断面について説明する。堆積物は中粒～粗粒砂を基底とし、その上位に①緑色腐植質土、②黒色腐植質土、③灰褐色粘土質シルト層、④黄灰色粘土質シルト、⑤黒色腐植質土、⑥暗褐色粘土質シルト、⑦暗灰黄色シルトの7層が堆積する。①緑色腐植質土は、基底の粗粒砂層の直上に明瞭な境界面をもって堆積する。本層は分解の進んだ植物遺体のみからなり塊状・無層理で、砂など他の粒子をほとんど含まない。②黒色腐植質土は、単層内に厚さ数mm程度の極細粒砂の薄層を挟み互層を呈する。

②黒色腐植質土は河道の肩部に向かって標高を上げながら、③灰褐色粘土質シルト層内に挟まれる。河道中央部では①緑色腐植質土の直上に②層が癒着する。また、④黄灰色粘土質シルトを欠いて、より上位の⑤黒色腐植質土が②黒色腐植質土に癒着しているのも確認される。基本的に②層から⑤層までは、下位の層をより上位の層が河道肩部に向かって覆ってゆくオーバーラップ構造を示す。これは河跡湖が徐々に埋積されていく過程を示すものである。



D区 河跡湖断面（北から）

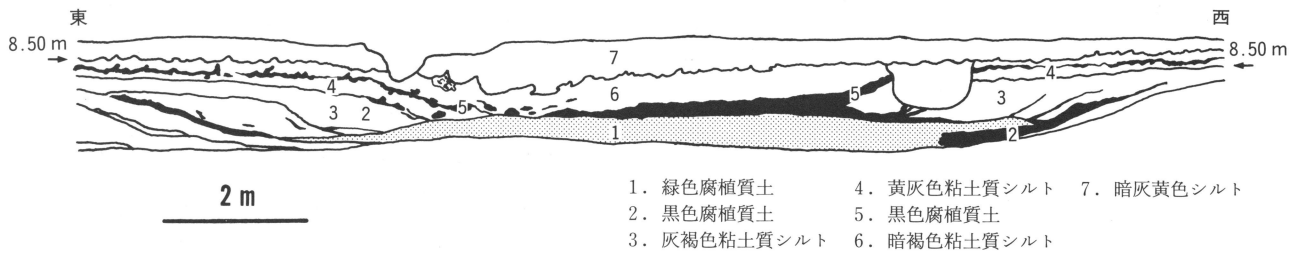
⑤黒色腐植質土は波長約50cm、波高約数cmの軽微な褶曲構造を伴っている。平面では黒色腐植質土と④極細粒砂質シルト層が判然と

入り交じった斑状形態を示す。堆積物が固結時に、地震による繰り返し応力を受けた結果生じた脱水構造である。

基盤砂層は淘汰良好で、粘土やシルト成分をほとんど含まないクリーンな砂からなる。極粗粒～粗粒砂から極細粒砂に至る上方細粒化傾向を示す。層理は河道の西側において東傾斜を示し、全体に西方から東方への側方付加 (lateral accretion) が確認される。このことから、旧流路は河道を東方に移動させながら、徐々に勢力が衰え9世紀から12～13世紀にかけて水生植物が繁茂する滞水環境に移り変わったことがわかる。

③灰褐色粘土質シルト層からウマの下顎骨2点、部位の不明なものが数点とカメの背甲も1点出土している。いずれも藍鉄鉱 (Vivianite) が沈着し、保存状態は悪い。また、②黒色腐植質土からヒメコガネやマメコガネ等の甲虫の体節片も出土した。

基盤砂層直上から長さおよそ2m、径およそ50cmの広葉樹の材が、流路の方向と平行に埋積していた。一般に、流下してきた木材は流向に平行して堆積することが知られており、本木材も流路が機能していたときの堆積物と推定される。また、木材の表面は炭化しており、流路両肩部では炭化物の集積が確認されている。(鬼頭 剛)



第7図 河跡湖堆積物断面図

まとめ 今回の調査によって下記の成果が得られた。

1. C区では、奈良時代の住居跡（8世紀初頭）が2棟検出できた。昨年度の93A区で検出したS B08・09（7世紀後半）に続く時期にあたる。また、平安時代の住居跡は、C・F区で計8棟検出できた。奈良時代の住居跡のように造付竈がはっきりとはしないが、焼土や炭化物が部分的に確認できる。したがって、何らかの炊事場的な空間が住居のなかで想定できる。时期的には10世紀後半代が中心となる。奈良・平安時代の集落は多くても2～3棟単位の小規模な集落が想定できる。

2. C・D区にまたがる旧河道からは、重要な遺物が出土した。まずは木製鐙。时期的には不安定なもの、同一層位の遺物から10～11世紀代に比定できる。この時期の鐙としてはもちろん遺跡からの出土例が少なく、全国的に見ても20遺跡（壺鐙・輪鐙を含む）に満たない。次に鉄製羽釜。鐙と同様に、同一層位の遺物から12世紀後半に比定できる。鉄製羽釜は再生することが可能なため、全国的に見ても出土例が極めて少ない。平安時代末期の鉄製羽釜として重要な資料といえよう。

3. 旧河道の时期的な変遷が明らかになった。8世紀代までは流路で、それ以降は河跡湖となる。また、13世紀以降は河跡湖の兩岸を区画する溝が、河跡湖の上位には方形土壙が見られる。

4. H区では井側が確認できる井戸が4基検出できた。时期的には13～14世紀を中心とする。なかでも、H b区S E02は井筒の曲物の下から常滑産甕を有する井戸が検出され、その形態から注目できる資料である。

5. H区からは15世紀後半から16世紀初頭の区画溝が検出できた。南北で最大45mの規模で、近接する池田遺跡で確認された約100m四方の区画溝を有する居館跡との関係が今後の検討課題となろう。

（永井宏幸）